

学校園教育推進サポート事業 報告書

学 番	1106	学校名	葛塚東小学校	校長名	鷲尾 健仁	作成者名	二野 憲子
学校教育推進サポート担当者名			二野 憲子			電 話	025-386-8727

1 実践のテーマ

子どもの学びをつなぐ葛塚東小学校区架け橋プログラム 【目標5】

2 テーマ設定の理由

葛塚東小学校では、令和5年度より校区にある7つの園に呼び掛け幼保小合同会議を設置し、葛塚東小学校区架け橋プログラムに着手した。令和6年度からは2園加わり、合計9園で架け橋プログラムを実施している。その活動は以下の通りである。

- ① 幼保小合同会議のべ5回（今年度末にもう1回予定）：課題の洗い出し、3か年の架け橋プログラム作成、架け橋期のカリキュラムの検討など
- ② かやま保育園、ぱんだ組保育参観および、合同協議会：参加者…葛塚東小、架け橋プログラム参加園、新津第三幼稚園職員
- ③ 葛塚東小学校1年生活科架け橋授業研修会：指導者…新潟大学 講師 有井優太 様、参加者…葛塚東小、架け橋プログラム参加園、木崎小学校職員
- ④ 年長児の体験入学

主な成果は3点である。1つ目は、小学校と園の教員が保育や授業をともに参観・協議することで、互いのよさや立場の違いを理解し、子ども観や指導観を再構築するきっかけとなったこと。2つ目は、特別なニーズのある子どもの保護者へぱんだ組を紹介する園が増えたことを筆頭に、園同士の連携が深まったこと。3つ目は、本校の低学年には不登校児童が、いないこと。上学年との差は歴然としており、架け橋プログラムの大きな成果の一つである。

一方で、架け橋プログラムは、単に入門期の子どもを支えるだけにとどまらない。幼児期に生まれた主体的な遊びや経験を学校での深い学びへとつなげていくために、特に架け橋期のカリキュラム、ひいては学校全体のカリキュラムについて改善の余地がある。

そこで、当校のこれまでの実績を踏まえ、葛塚東小学校区架け橋プログラムをテーマに設定した。

3 実践内容

- (1) 架け橋期のカリキュラムの実施・検証
- (2) 合同会議を含む、幼保小教職員連携の内容と方法

4 実践計画

実施時期	実施内容（研修会、先進校視察、授業公開 等）
4月	架け橋プログラム合同研修の実施 横浜市立東本郷小学校第1回接続期研修会スタートカリキュラム授業研究会参加 葛塚東小学校スタートカリキュラム実施 スタートカリキュラム授業研修会
5月	第1回合同会議
6月	園校での関連単元の実施（2月までの期間内に1単元以上）
8月	福井大学教育学部附属幼稚園、附属義務教育学校合同教育研究集会への参加
9月	参加園と葛塚東小職員による保育参観および、合同協議会
11月	アプローチカリキュラムの開始（各園、3月まで）
12月	第2回合同会議
2月	体験入学 第3回合同会議 次年度スタートカリキュラムの立案

## 5 成果

\*上付き(1)(2)は実践内容の関連を示す。

- ① 校園の教員が互いのよさや立場の違いを理解し、子ども観や指導観を再構築するきっかけとなった
- ② 園同士の連携が深まり、合同保育が行われた
- ③ 本校の1学年には不登校児童がいない
- ④ 上学年でも教科横断的、関連的な実践が行われ、主体的で探究的な学びの充実が見られ始めた

成果は、1年生単独にとどまらず、園内、園同士、学校全体に及んだ。1年間の実践を述べる。

まず、4月7日に参加園と講師をオンラインでつなぎ、架け橋プログラム合同研修会<sup>(2)</sup>を行った。「子どもは有能な学び手であり、子どもの調べたい・やってみいたいことが実現できるように環境を整え、カリキュラムデザインをすることが大切である」ことを学んだ。年度当初に参加園校で同じ方向を目指すのに役立った。

4月18日には、横浜市立東本郷小学校でスタートカリキュラム授業研究会に参加<sup>(2)</sup>した。そこでは、クラスごとにテーマを設定し、午前中の授業が教科横断的に行われていた。このような形式は、園での活動に似ており、子どもが自然な形で探究していた。教科横断的な学習で学びを深めることは、次期学習指導要領でも目指すところである。

4月30日の当校でのスタートカリキュラム授業公開<sup>(1)(2)</sup>は、3学級が1時間ずつ公開する予定だった。しかし、東本郷小学校のような授業になるよう、デザインを急遽変更した。教科の内容を柔軟に組み合わせ、3クラスでそれぞれテーマを設定して授業を行った。令和6年度は校内だけに授業を公開したが、今年度は参加園も研修会に加わった。当校職員は、参観する時間を学年内で調整し合い、全職員がいずれかの授業を参観できるようにした。協議会では、園の職員も併せてグループ協議を行った。園の職員から「園と同様な環境や活動で、子どもが生き生きと学んでいた」「授業者の働き掛けから自分の働き掛けを見つめ直した」などという感想が寄せられた。指導者の新潟大学講師 有井優太様からは、子どもの姿と教師の働き掛けの意味について具体的に解説していただくとともに、「架け橋プログラムによって、幼小それぞれで自校園の教育を見直すことが大切である」とご指導をいただいた。

夏休みには小鳥の森こども園訪問<sup>(1)</sup>を行った。0歳児から5歳児全クラスを公開だった。当校は職員が多いため、半数の職員が参加した。他の研修と抱き合わせで1年おきに園訪問ができるようにしている。協議会では、園校の職員が混ざってグループ協議を行った。他園の職員も小学校職員も幼児期の終わりまでに育てほしい姿(10の姿)を基に子どもを見取り、環境構成や教師の働き掛けから学んだことを交流した。公開園からは、「自園の取り組みを見つめるよい機会になった」と感想が寄せられた。

6月に福井大学附属園校研究会へ参加<sup>(1)</sup>した職員は、幼稚園の子どもの思いや願いを大切にしたい保育や小学校の教科横断的な授業を参観した。1年生活科の秋単元を構想する際、プログラム参加園に秋の自然物を使った遊びなどについてアンケートを行った。1年生の子どもたちの園での経験を踏まえた単元デザインや環境構成などを行ったことで、秋の自然物を用いた遊びが充実した。

2年生の担任は、前年度に取り組んだスタートカリキュラムや、生活科を中心とした関連的な指導を基に、生活科と国語の教科横断的なカリキュラムデザインに取り組んだ。生活科で愛着をもって育てているモルモットについて、説明書やポスターをかく学習である。自身の働き掛けによって得た気づきが表現された作品になり、表現することで気づきが自覚化されより深い学びとなった。このような、子どもの学びを中心とした単元デザインは、他の学年にも見られるようになった。

年3回の合同会議<sup>(2)</sup>は、2年前に始めた。始めは小学校側からの提案や園からの発表にとどまっていた。しかし、会を重ねるごとに園から積極的な意見が出るようになり、率直な協議ができるようになった。園の歩き遠足の途中での当校施設の活用、1年生と合同ドッジボールの提案が寄せられた。また、架け橋プログラムをきっかけに、少人数の園が人数の多い園と合同保育を行った。

架け橋期のカリキュラムについては、同じ形式で実践を表し、第3回合同会議で交流する予定である。

この2月、新採用の当校職員が言った。「1年生がスタートカリキュラムで、自分がやりたいことをあれだけ追究しているのだから、総合的な学習の時間を見直したい」葛塚東小学校架け橋プログラムにより、架け橋期のカリキュラム充実と、学校全体のカリキュラム改善の端緒を開いた。